特集

子供の命を預かる教師の危機管理能力を高めるには

――日頃の実践の積み重ねで いかなる状況にも対応できる判断能力を――

西村金一
一般社団法人日本安全保障・危機管理学会理事
笛木茂美
群馬県渋川市立中郷小学校教頭

はじめに

２０１５年11月フランスのパリで、２０１６年３月ベルギーのブリュッセルで同時多発テロが発生し、多数の死傷者を出した。日本では、テロ発生の状況、その背景、その場に居合わせた人々へのインタビューについては詳しく報道される。だが、「その場に居合わせた市民や関わりがある企業・機関がどのように対応すればよいのか」については、報道の焦点とはならない、自分がその場に居合わせたらどうすればよいのかについての関心も少ない。

日本では、国内外でテロに遭遇した場合や国内の災害の場合、自分の命を守るために、「どのような状況判断をすればよいのか」「最善の案を採用するプロセスはどうなのか」など、国や自治体から指導がないのが現状だ。各自治体からは防災ハンドブックが配布されているが、状況判断をど

のように行い危機を乗り越えるのかについての記載は充実していない。

子供の命を預かる教育現場であっても、これらのことが必要なのは明らかである。そこで、教育現場などで、子供の命に直接関わった事件を振り返って見るとどうであろうか。

２００１年６月大阪府池田小学校での小学生無差別殺害事件の対応、２０１１年３月大津波警報が出た際の石巻市大川小学校での状況判断、２０１４年４月「セウォル号」沈没事故…。これらの事件・事故において、教師や生徒が命を守るために、「どのような状況判断をすべきだったのか」「それに基づいてどのような行動を採ればよかったのか」について、重点的に議論されただろうか。あるいはどうすべきかについて、報道されただろうか。どちらかというと、「誰に責任があるのかないのか」が、焦点になっていたと記憶している。それは、悲しむ被害者に責任を負わせないという思いやりが強調されたからだろうか。

教育現場では、「危険なことは、自分の身近なところには起こって欲しくない、起こらない」と自分達に都合の良いように考えてしまうのか、「もしかしたら、自分が受け持つ子供たちに危機が迫ってくるかもしれない」という切迫した認識は少ないように感じる。あるいは、重要だと認識していても、どうしたらよいのか、何を準備しておけばよいのかなど、十分理解されていないように思われる。それゆえに、子供達が直面するかもしれない危機への対応に関する教育が行われていないのだろう。

現在、自治体の危機管理監候補者への教育に携わり、『究極の危機管理』（日本安全保障・危機管理学会編、内外出版）を編集した西村と小・中学校での教頭経験、新採用の教師の研修を担当した実績とともに、クライシスマネージャーの資格を有する笛木が、「教育現場では、危機管理を具体的にどのように行えばよいか」「子供の命をどのようにして守るべきか」という疑問を持ち、課題を設定した。

子供の命を預かる教師が適切に状況判断を行い、子供たちの危機管理を確実に実施するために、実際に教育現場に当てはまる事例をもとに、教育現場における状況判断とそれを効果的に訓練できる図上研究（訓練）要領を考案した。その具体的な手法を紹介する。

考察の順序については、①日本の教育現場では、なぜ危機管理の教育が活かされないのか、②教育現場で求められる状況判断、③状況判断能力育成のための方策―を説明する。特に、②では、危機事態における教師の対応がいかに重要かを、２０１４年韓国で起きた「セウォル号」の沈没事故や２０１１年東日本大地震の大津波災害における状況判断の事例をもとに考える。

にしむら　きんいち
1952年佐賀県（唐津市）生まれ。法政大学文学部卒。防衛省入省。統合幕僚監部・陸上幕僚監部等の情報分析官、防衛研究所研究員、陸上自衛隊幹部学校戦略教官、三菱総研国際戦略研究グループ専門研究員を歴任。日本安全保障・危機管理学会理事、軍事・情報戦略研究所長 。著書に、「北朝鮮の実態」（原書房）、「自衛隊は尖閣紛争をどう戦うか」（共著・祥伝社）、「究極の危機管理」（共著・内外出版）。

１　日本の教育現場では、なぜ危機管理の教育が活かされないのか

教育現場における教師の人材育成は、学校教育の核となる「教えるために必要な知識や技能、実践力を身につけさせる」ことを中心として行われている。どの学校でも職場での実務で、教師にその能力を十分発揮して欲しいと考え、重点的に取組んでいる。特に、学校における人材育成として

ふえき　しげみ
1956年群馬県生まれ。群馬大学教育学部卒。前橋市立小学校教諭として採用、群馬大学附属小学校文部教官教諭、前橋市の中学校や渋川市の小中学校教諭として教育実践を積む。学年主任や教務主任、初任者研修拠点校指導教員として人材育成にも取り組み、渋川市上白井小学校や渋川北中学校の各教頭を歴任。現在、渋川市中郷小学校の教頭。日本安全保障・危機管理学会クライシスマネージャー資格取得（2013年）。主な研究論文として、「小学校における身につく授業の指導と評価」、「道徳的価値の自覚を高める指導の工夫」。講演も多数。

校内研修は重要な役割を持ち、多くの学校で、授業改善のための研究・実践が行われている。

また、安全主任や生徒指導主任などの分掌関係の研修や生徒理解の方法や手法など、教育現場特有の研修も行われている。さらに、各種避難訓練や安全に関する研修も行われている。

このように、多くの教師研修が行われ、校内体制が確立され、協働意識が高ければ、危機対応については、問題ないはずである。しかし、現実には、問題行動への適切な対処ができず、命に関わる事故や深刻な不登校・重大ないじめ事件に発展してしまう事例が数多い。このことの要因として個々の教師の判断力不足が考えられる。

一方、教師に身に付けさせたい教育活動の基盤となる能力として、〝責任感や協働性〟〝企画力・判断力〟などの基礎となる能力の必要性も求められてはいる。しかし、教師に対する多くの各種研修は、実質的な能力自体の向上を目的としたものではない。これらは、日々、職場において経験を積んでいく過程で向上させることに委ねられているといってよいだろう。子供の命に関わる重大事故に発展させないための日頃の対応を自立してできるような能力を直接狙った研修がないのが現状である。

このような現状の中で、特に、教育活動に必要な基盤としての能力のうち、危機的な場面に絶対に必要になる状況判断能力を教師が身につけることがとても重要である。その能力は、危機場面だけにとどまらず、日常の生徒指導や授業中の生徒指導の場面で活き、校内の協働体制・連絡体制の強化にもつながって教育活動を推進する力となっていくと考えるからである。

2　教育現場で求められる状況判断

(1)　状況判断が生死を分けた例と必要とされる状況判断

(ア)　韓国「セウォル号」事故での引率教師や生徒の状況判断

２０１４年４月「セウォル号」が、韓国南西部

海上で転覆し、沈没した。同船には、高等学校2年生生徒325人と引率教師14人も乗船していた。

多数の死者を出した原因として、「救命胴衣を着用して待機してください」「動かないでください」という船内放送が流れたため、生徒たちのほとんどはその放送に従って待機したままだった。そして避難できずに死亡した。

引率教師（生徒）が実施すべき状況判断を考察すると、まず、何を決めるべきか、いつ行動するのか、を考えることである。

第1案：速やかに下船（避難）する

第2案：現場を見に行く（情報を収集する）

第3案：指示に従って何もしない

教師・生徒たちは状況判断をせず、誤った指示に従って逃げ遅れ死亡した。

この状況での判断が手順通り実施できていたとしたら、「何をすべきか」気づいたはずだ。そして、多くの命が助かっていた。

命が懸かっていることであり、少なくとも第2案の現場を見に行く（情報を収集する）ことだけは、実施しておくべきであった。

(イ) 大津波警報が出た際の石巻市大川小学校教諭の状況判断

児童は地震直後、教師らの誘導で校舎から校庭へ移動した。数分後には、大津波警報が出た。教師らは対応を検討していた。避難場所について裏山派と橋派の間で議論が行われ、結果、橋の方向に避難することになった。移動中に教師・児童は津波に襲われた。

教師が実施しなければならない状況判断を考察すると、次のとおりとなる。

第1段階：「まず、何を決めるべきか」を考察する

1案：避難する

2案：留まる

大川小学校の裏山

第2段階：1案を採用した場合
　1案「急ぐ」
　2案「ゆっくりでいい」
　3案「情報を得て判断する」
第3段階：「どこに避難するか」
　1案「裏山に避難する」
　2案「橋に避難する」

実行の可能性があるのはどれか。何が最も優先されるべきか。これらの選択次第で「生徒の命運」が決まるのである。

日頃から図上訓練を行っておけば、対応策を案出する時間は短縮され、素早い避難が実行できたと考える。

(2) 状況判断能力と情報分析

危機を未然に防止するために、一般的に危機管理では、事前に情報を収集し、危機の兆候（予兆）を掴み、そして、その時に何を判断して決心するのか、そのプロセスをイメージできることが重要である。事前に訓練し、危機を未然に防止すること、危機に直面した時にどうやって対応するか、あるいはその時の被害を最小限に食い止めることを学んでおくことである。

状況判断能力とは、「まず、状況を分析すること、次に、いくつかの方針を案出すること、そしてその中から採るべき態度・方針を決定すること。その力」である。状況を分析するためには、情報分析の手法を身につけることが必須である。

> 情報（intelligence）分析は、「収集した生情報（information）を整理・統合し、ある行動の判断材料として必要な要素（事実関係、背景事情、予測される今後の動き）にあてはめて、それぞれを明確にすること」を意味する。

情報分析には、①パターン分析、②兆候分析、③相関分析、④論理分析―などがある。このうち、学校現場の危機場面で活用できる分析方法は、特に②の兆候分析である。

問題行動の対処に活用できる兆候分析とは、何気ない断片情報などから従来とは異なる新たな動きを察知し、予測する分析方法である。兆候分析を可能とするには、「対象を取り巻く周囲の情勢や事情の変化があるか否か」「子供の言動に従来とは異なる何らかの変化が感じられないか」「子供の表現した物などにそうした兆候がありはしないか」など、常に繊細な注意力で子供を観察し続ける必要がある。

兆候分析は、従来のパターンと異なる事象であるために見逃してしまうことが多い。

「そういえばあの時そのような兆候が確かにあった」などと、後になってホゾを噛む経験はよくあることである。兆候分析の概念には、さらに僅かな断片情報で重要事項等をも解明する分析手法という意味もある。即ち、「一を知って十を知る」の意である。こうした分析を可能にするためには、日頃から子供に関する豊富なデータの保有に加えて、指導者の教育観や諸々の事象に対する造詣の深さ、さらには分析能力、注意力、柔軟な思考能力、そして豊富な経験と熱意などが前提条件とされる。

問題行動を分析するには、情報感覚が大事である。これについては、前述の『究極の危機管理』の中で、情報感覚とは、「情報活動を有効かつ効率的に行うのに必要な感覚及び能力のことである」として、ア問題点の発見・把握力、イ多様な理解力、ウ想像力・連想力・勘、エ執着力、オ総合及び統合力―が必要であると述べられている。

(3) 日常における状況判断

学校においては、瞬時・日常の状況判断（問題処理）が重要である。これは危機事態の状況判断を学ぶことで、確実に行われると考える。また、この力は、あらゆる場面においても活用されることとなる。

たとえば、日常の生徒指導の場面でも最大の危機を想定して情報を分析し、状況判断を下し、適

切な指導を行えれば、いじめ自殺などの重大な事故に発展してしまうことを事前に防ぐことができる。このような危機管理意識を醸成し、その能力を高めることは、今の学校現場で大変重要なことである。

兆候の発見と、発見したあと実行に移すまでのポイントや流れを身につけ、正しい判断ができるようになることが重要である（図1）。

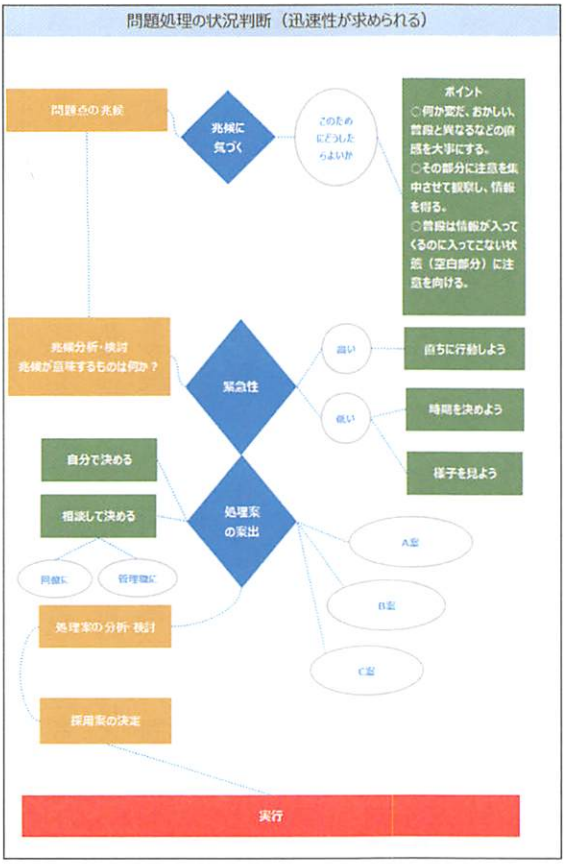


図1　瞬時・日常の状況判断（問題処理）

(4) 管理職の役割

情報（intelligence）の報告を受ける側は、校長本人の場合もあるが、通常は、校長を補佐する立場の教頭が第一の窓口となる。こうした窓口を担当する人物すなわち教頭は、情報感覚、事務処理のセンス、さらには情報の提供者との間の信頼関係や日頃のコミュニケーション等、情報の活用面に大きな影響を及ぼすため、これらの能力を高めておく必要がある。

また、学校管理職は、目標を達成するために、日常的・継続的に状況判断を行い、適時適切に決断（決心はトップリーダーの責務）しなければ

ならない。校長は、状況判断と決心を短時間（瞬時、数秒）で実施しなければならない時がある。その場合には、「今、何を決めなければならないか」「どんな処理案があるか、1つか複数か」、その際「最も重視しなければならないことは何か」を考えて、最良の案を選択することになる。短時間で状況判断と決心をする場合にも、最良の案を採用したい。そのためには、事前準備の段階で、あらゆるシナリオを想定して、計画を作成し、図上訓練などで、想定できることはあらかじめ判断を決めておくことが必要となる。もちろん、管理職だけでなく、教職員の状況判断能力を養っておき、情報が正しく迅速に管理職まで上がる校内体制を整えておくことも必要である。

(5) 状況判断能力向上の効果

状況判断能力の向上による効果が現れる場面は、危機管理において顕著である。いじめ等問題行動に対する対処、不審者侵入への対処、地震等災害時への対処、現在の新しい課題となっている食物アレルギー事故等である。前掲のフローチャートにあるように、兆候段階に適切な行動をとれれば未然に防げるし、危機事態になっても最悪の事態を想定しての判断・行動であれば、その被害を最小限に抑えられる。

危機管理以外でも、学校現場では、種々雑多な問題が日常的に起こる。これらの問題への対処が適切な判断のもとに行われれば、教育活動はスムーズに推進していくだろう。更に、処理案の案出時に他との協働が生まれる効果も期待できる。

職員全員の状況判断の能力を向上させることは、日々の生徒への対応や親への良好な対応の積み重ねを通し、学校運営の下支えになることだろう。様々な研修で身につけた知識や技能を適切な判断で最大限活用できる教職員が育つことになる。したがって、その効果は、際だって目に見えるものではないが、確実に教育改善につながるものと考える。

(2) 実践例―危機管理研修で判断力を高める

群馬県渋川市立渋川北中学校で職員の危機管理能力向上の必要性を同校校長に進言し、次のような目的で不審者対応の図上訓練を行った。

○ 危機管理について話を聴き、危機管理の知識を増やすとともに危機管理意識を高める。

○ 不審者侵入を想定した図上訓練を通して、不審者に対応する能力（意思決定能力・対応能力）を高める。また、役割行動を確認するとともに、現在のマニュアルを評価・検証し、改善する。

(ア) 実施日　2015年1月

(イ) 研修の概要

〈場所〉　図書室

〈参加者〉　25人

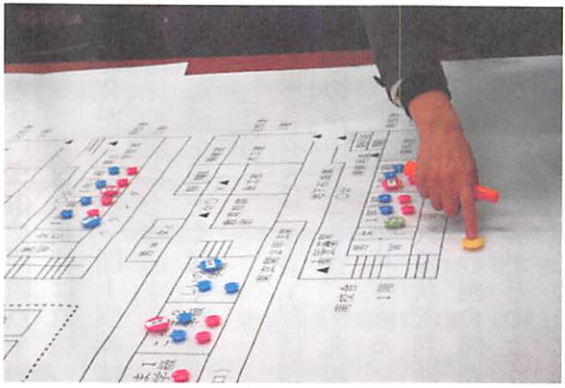
〈内容〉　危機管理の要点―（略）

不審者対応の図上訓練

コーディネーターが不審者の動きを中心に、状況付与を行う。それぞれの立場で、どう行動するかを話し、よりよい対処の仕方を討議し、確認する。

危機の兆候の段階・危機発生直後の段階・被害が最も大きい段階・回復しつつある段階・事案後の段階のそれぞれについて、話を進めていく（写

図上に教員と生徒を配置



不審者の動き

真は中学校での図上訓練の風景)。あらかじめ作成したシナリオ表(不審者対応の図上訓練)に沿って、全員で討議を重ねた。

(ウ) 図上訓練を実施して

事後の感想の「実際は考えても、考えても答えは出ない。考えられないものであるが、今、できる限りのことを考えておかなければならない。1つモデルを作り、全員が統一見解を持ちながら、全体像を把握し、動けるようになっていないといけない」「地図とコマで全体の動きがよく分かり、時系列に対処の仕方を皆で考え、意見を出し合い、確認できた。実際に起こったら、どうしたらいいか、教えられるのではなく、考えることができた」などから、危機の場面に遭遇した管理者やその場にいた先生が、何をすることが最善であるのかを考えることができた。

また、「とっさの時に、適切な判断・行動・指示をすることの難しさや大切さを感じた」「自分がどうするか、そして周りにいかに協力を願うか、そして指示をどう伝えるかなど学習させてもらった」「見慣れない人物が来たら、早めに声を掛けることや周りの先生たちと相談することの大切さを知った」「実際に起こったときには、対応の速さが大切であると感じた。」などの感想から、瞬時に状況判断し、決心して行動を起こすことの大切さを学び、その力を高めることができたと考える。

さらに、研修が終わっても、職員室で討議内容が話題になったり、生徒にも事前に指導しておかなくてはいけないなどの話しになったりと、先生方の意識の高まりが見られた。

研修後、明らかになった課題のうち、さすまたの準備・生徒玄関の施錠・防犯カメラの設置を進めた。今後、生徒の引き渡しや集団下校訓練等も含めた実動訓練の実施も考えていくこととなった(研修アンケート結果は末尾参照)。

(3) 図上訓練とシナリオ訓練の発展性

校舎図を使用した図上で行う訓練の方法も有効

表　不審者対応の図上訓練シナリオ表

日時	不審者の行動	子供の状況	職員の動き			危機管理のポイント
			校長	教頭	先生	
2時頃	2時頃、30代の男が学校の付近をうろついている。	授業中	②（職員に通知）	②（警察等に通報）	①養護教諭・技術員が、学校の周辺をうろついているのを見た。（校長・教頭に報告する） ②先生（男性）：（「挨拶」、「何かご用」の質問）	＊学校職員の警戒心が強いことで、侵入者の犯罪をあきらめさせる。
2時過ぎ	テニスコート脇階段から、校舎に向かう	授業中			誰も見ていない。	＊できれば、ここでストップできればよい。
2時5分	1年玄関から進入。	授業中			誰も見ていない。	
2時10分	刃物を持って、1年の教室に侵入する	・叫ぶ生徒 ・呆然と立ちすくむ生徒 ・逃げる生徒	・生徒から報告を受けた。 〈どうする？〉 （職員への指示） （現場確認）	・生徒から報告を受けた。 〈どうする？〉 （校内放送） （避難誘導） （警察・消防へ連絡）（現場確認） 	・侵入を受けた先生（女先生と仮定）は、〈どうする？〉 （他の職員に知らせる）（子供を逃がす） （大声で叫ぶ）（何ですかあなたは） （逃げろ） ・隣の先生生徒の叫び声が聞こえる。〈どうする？〉 （現場確認、すぐに見に行く） ・2階の先生生徒の叫び声が少し聞こえる。〈どうする？〉 （避難を考える） ・生徒（職員室に行って、報告）	＊大声で知らせる ＊侵入された教室の生徒を逃がす。 ＊きめ細かな指示を出すのは難しい。 意思決定のポイントを聞き、全員で考察
2時12分	侵入者が女生徒をつかみ殺傷を始める。	・上記 ・一人ずつ殺傷される。	〈どうする？〉 （現場指揮） （校長と教頭の役割分担） （警察に連絡しろとどなる） （さすまたを持ってこさせる） （イスを一斉に投げつける） （仕んだ隙に、一斉に捕まえさせる）	〈どうする？〉 （校長と教頭の役割分担） （警察・消防等へ連絡、警察の誘導） （学校全般の掌握、特に生徒の掌握）	・男先生〈どうする？〉 （イスや机を投げる） （さすまたを準備する） （棒などで叩く、押さえ込む） ・女先生〈どうする？〉 （校外に避難させる。学校から離れる。） ・保健の先生〈どうする？〉 （負傷者の応急手当）	＊犯罪者を捕まえることと、生徒を掌握することの役割分担をする。 ＊警察や救急車を早急に呼んで、誘導する。 ＊犯罪者に恐怖感を与える。「警察を呼べなどと叫ぶ」「先生による一斉攻撃」 ＊男の先生が、侵入者を押さえる。 ＊広い範囲に広がっているので、連絡係をつける。（伝令）
2時15分	侵入者が別の教室に侵入する。	上記・一人ずつ殺傷される。	〈どうする？〉 （現場指揮）	〈どうする？〉 （警察・消防を誘導する）	・男先生〈どうする？〉 リーダーは誰か？ （現場で侵入者を押さえる） （しばる） （協力して拘束する） ・女先生〈どうする？〉 負傷した生徒をどうするか？ リーダーは誰か？誰が指示するか？	＊犯人を、できるかぎり早急に押さえる。そのため、一人の指揮官による統制と指示に基づく一斉攻撃 ＊警察を早く誘導する。 ＊負傷者の応急手当
2時20分	侵入者の身柄を拘束する。	・負傷生徒・死亡生徒・避難生徒	〈どうする？〉 ・学校全部の状況を確認する ・犯人の監視、救護の支援、父兄への引き渡しなどの指示を与える。	〈どうする？〉 （状況確認） （被害状況を逐次連絡） （だれがどうなったのかを確認、記録） （部外からの電話対応。誰を優先して対応するか）	・男先生（どうする？） （犯人を縛り、数人で監視する） ・負傷者を迅速に救急車に乗せる。 タンカで1階に運ぶ ・女先生〈どうする？〉 （生徒を学校に戻す） （教頭と伴に父兄に引き渡す）	＊救急車を早く誘導する。 ・いろんな所から、質問電話が殺到する。一段落すれば、電話対応係をつくる。 ＊現場検証のための現場保存
2時25分	犯人を警察に引き渡す	・学校に戻る・殺害現場には、血の痕跡がある。	〈どうする？〉 （マスコミ対応準備。教育委員会からの質問対応）	〈どうする？〉 （緊急メールで保護者に連絡する）	・男先生〈どうする？〉 （殺害現場、警察の同意を得て、片付ける。掃除する。） ・女先生〈どうする？〉 （子供を父兄に引き渡す） ・〈殺害現場のクラスの生徒をどこに入れるか？〉 ・門を開けて、警察・消防を誘導する	＊生徒に現場の悲惨な状況を見せない。 ＊早急に父兄に引き渡す
2時30分		・帰校	〈どうする？〉 （記録確認） （今後、どうするか検討、教育委員会と調整） （警察に今後の対応を調整する）	〈どうする？〉 （記録確認） （後片付け指導） （先生達の心のケア） （この後どうするか検討）	・先生〈どうする？〉 （後片付け）	＊今後、学校はどうするかを検討する。 ＊現場検証後に後片付け ＊記録

であるが、学校現場では、場所の想定がいらない場合や特定できない場合がある。そのときには、シナリオだけによるシナリオ訓練も適している。これは、今まで行われてきた事例研究とは違い、生徒の問題行動や授業の流れなどをシナリオにしてシミュレーションを行い、そこに状況判断を入れていくものである。図上訓練と同じ効果が期待できるとともに、あらゆる問題場面の想定ができることから、教育現場での大きな課題であるいじめの問題や食物アレルギー対応など広汎に活用できると考える。

また、教師が、シナリオ作成とコーディネーターの技能を身につければ、学校・学年行事（たとえば、旅行的行事や班別活動）の危機回避場面や災害時の避難など、実際に体験できないことに対してシナリオ訓練を行い、子供の状況判断能力を高める授業にも発展できる。

おわりに

学校にとって、教師の危機管理能力の育成は、重要な課題の1つである。

体験的に学ぶことができる図上訓練やシナリオ訓練を実施していくことは、教師の教育活動の基盤となる能力を確実に高め教師の成長をより早く促すことができる。

特に、学校の1番の使命である子どもたちの命を守ることは、教育現場での最大の危機管理である。図上訓練・シナリオ訓練の手法は、子供たちの命・安全を守ることができるかどうかを決するそのときの状況判断を確実なものにする。

さらに教育で危機への対応を学んだ子供たちが成長して、日本の各所でそれを普及し、危機に直面した時には、多くの人々が適切な状況判断を行い、危機を避けられるであろう。自らの命は自ら守り、幸せな一生を送る日本人が増えることを願う。

研修アンケートの結果

① 危機管理について心に残ったことをお書きください。

・危機管理とは「最悪の事態」を想定することが本当に大事だと思った。
・最悪の事態を考えるのは、非常に恐ろしいと感じたが、考えておくべきだと思った。
・意識はしているが、実際に動こうとすると、どうなるか不透明である。
・普段から意識して、突発的なことにも即座に対応する訓練をしておくことの必要性を痛感した。
・1つモデルを作り、全員が統一見解を持ちながら、全体像を把握し、動けるようになっていないといけない。

② 図上訓練が有意義だった理由をお書きください。

・パニックになると、動けないため、少しでも想定しておくことは重要である。
・不審者対応は、当日に指導を受けて終わりというのが多いので、全員の先生で話し合うことは勉強になる。
・見たことで、頭で想像できた。
・実際に行動してはいないが、もしもの時の想定ができた。
・多くの職員が自分の問題として考えられたのではないかと思う。
・事前～事後のことを全員で考えながら行うことで、ある一定の動き方の指針が共有できるから。いざという時なので、やらないと何もできないから。
・地図とコマで全体の動きがよく分かり、時系列に対処の仕方を皆で考え、意見を出し合い、確認できた。実際に起こったら、どうしたらいいか、教えられるのではなく、考えることができた。
・実際に起きうる場面を想定して、意見の交換（行動を含め）ができた。

③ 不審者対応訓練をして、新たに認識したことや身についたこと、学習したことがあったらお書きください。

・初期段階での対応の仕方がよく分かりました。
・協力の大切さ、油断しない。
・とっさの時に、適切な判断・行動・指示をすることの難しさや大切さを感じた。
・自分がどうするか、そして周りにいかに協力を

願うか、そして指示をどう伝えるかなどの学習ができた。

・目の前で、「生徒が切られていく」という状況で担任（大人）としてどう動けるか…とにかく手当たり次第、物を投げていくしかないのでしょうか。あと、クラス内の生徒にどう動くべきか普段から考えさせる必要がある。

・見慣れない人物が来たら、早めに声を掛けることや周りの先生たちと相談することの大切さを知った。

④ 今後、学校で取り組まなければならないことについて、お書きください。

・実際にその場所で対応をやってみる。（思わぬ不測があるかもしれない）引き渡しの練習を保護者ともやった方が良い。（流れが分かっていた方が良い）

・行政への働きかけ、関係機関との協力、現場の様子を良く理解してもらい、防犯カメラの複数設置、パトロールの強化等の実施など不審者を少しでも近づけない環境作りを進める。

・様々な可能性があるので、繰り返しシミュレーションを実施すること、生徒・教員1人1人の意識を高めること。

・教員はいつも同じ教室、場所にいるわけではないので、様々なパターンをやり、確認する。図上→行動でやってみる。

・今回の状況を考えると、生徒も一緒に不審者対応の訓練をしていく必要がある。

・話し合って合致したルールをマニュアル化し、年1回マニュアル通りに動かし、修正する。

⑤ その他、危機管理研修について自由にお書きください。

・全国の事例などに基づいて、定期的に行う必要があると思う。

・不審者対応は、年度始めにやっておくと新しく来た先生も校舎の状況が分かると思う。

・生徒自身にも考えさせる機会を設けたい。

・実際に起こったときには、対応の速さが大切であると感じた。